

20 世紀スペインの政治・社会と植民地モロッコ

帝国復活 / 「モーロ人」の恐怖 / 植民地体制の呪縛

4-II-2005 / 深澤安博

本報告は、表記テーマに見通しを与えることと、リーフ戦争に対するスペイン社会の反応（下記 II、とくに 2.2.）の解明を 2 大目的とした。

0. 2004 年 ジブラルタル海峡の向こう側

報告者は 2004 年に 5 か月間スペインに滞在したが、この年は表記テーマに関することについても以下に挙げるような様々な事件・推移が見られた。

3 月 11 日の列車爆破事件（192 人死亡） / 同月 14 日の総選挙での PP（日本での通称は国民党。実際の響きは民衆党か人民党）の敗北、PSOE（社会労働党）の勝利 / 4 月の政権交替によるイラク撤兵（～ 6 月） / 移民の急増（イスラーム防波の可視的象徴としての海峡） / PSOE 政権による移民政策の転換 / 西サハラをめぐる外交戦など。

また、これらに関して様々な言説が発せられた。その中でもセサル・ビダールの『イスラームに対抗するスペイン ムハンマドからビン・ラディンまで』 César Vidal, *España frente al Islam: de Mahoma a Ben Laden* (Madrid, 2004) を取り上げなければならない。学問的なものではない本書をあえて紹介する理由についてはすぐ後で述べる。本書は以下のような論を展開する。

スペインは、近くにある「他文化」で「敵」であるイスラームと 8 世紀から闘って来た / スペインが欲したからではなく、セウタ・メリーリャを守るためと国際的圧力によって、スペインは 20 世紀初頭にモロッコ保護領を引き受けざるをえなかった / リーフ戦争は 2 つの文化間の戦争（リーフ＝イスラームの立場からは聖戦）だった / イスラームとの闘いは現在も続いている（「文化としての我々の生存を守るためのつらいが結局は不可避の闘い」 / レイラ島（ペレヒール島）事件（2002 年 7 月）の教訓としてのアメリカ合州国との同盟 / イラク戦争は西欧（アメリカ合州国、西欧、イスラエル、カナダ、オーストラリア、日本）の防衛同盟を強化した / 移民は「国の領土そのものに入り込んだ第 5 列」である、など。

見られるとおり、文化（ビダールにあってはほぼ宗教と同義）還元・対抗史観の権化とも言うべき言説である。

本書の内容を紹介したのは、9 月に PP 政権の前首相アスナールがアメリカ合州国のジョージタウン大学の客員教員として次ぎのような「講義」をしたからである 「アルカー

イダとスペインの問題は8世紀に始まる」、スペインは「そのアイデンティティ」を失うことと「モーロ人によって征服されてイスラーム世界のもう一つの端くれとなる」ことを拒否したのだ。アスナールは、まさに前掲ビダールと本質的に同じことを述べたのである。アスナールは、ビダールの著を下敷きにしたのではないかと考えられる。

さらに同9月、PSOE 政権の現首相サパテロが国際連合総会で次ぎのような演説をした。「[テロリズムの]根源を知ることができるし知らなければならない」、「西欧世界とアラブ・ムスリム世界との間の文明間の同盟」を提起する。サパテロがアスナールをどこまで意識したのかについては不詳である。「同盟」を提起するサパテロの意図はよくわかる。実際、サパテロ政権の政策にもそれは表れている(上掲の移民政策や西サハラ政策、さらに、マドリードでの「アラブの家」設立構想など)。しかし、この場合にも文明を固定的に認識している(この点でビダールやアスナールと重なる)ところがある。

以下、20世紀にスペインと(が)モロッコが(と)関わるようになった3大重要時期について述べる。

I. 帝国復活の対象としてのモロッコ(1898-1909年)

報告者は、1898年の「破局」=植民地帝国の完全な崩壊後、いかにスペインの社会と国家を再生させるかということについて、20世紀初頭までに、3つの方向性が提起されていたのではないかと考えてきた。それらは、社会の改革、体制の部分的改革、失われた帝国の復活である。その中で、結局あるていどの力をもって実際に動き始めたのは最後の帝国復活である(当時使われた言葉では、「弱体国家」「内向的国家」に甘んじないこと)。

1898年後に採らざるをえなくなった国際的協調政策の中で、スペイン国家はモロッコ分割に加わって行く。1904年の英仏協定を受けての同年10月のフランス・スペイン協定がその結果である。この頃から1930年代まで、スペインのヨーロッパ諸国との外交関係は主に海峡をめぐる諸問題によって形づくられたと言ってよい。

この1904年には明確な姿を見せ始めるアフリカ・キャンペーンは、商工業経営者層が主導したものであり、スペイン社会・国家・経済の「再生」における意識的なイニシアティブだった。それは、「国権」拡大による危機乗り切りの意図でもあり、(国内の)社会・政治・経済改革に触れようとするものではなかった。この20世紀初頭のスペインのアフリカニスは、当初「平和的侵入」を掲げた。それは、1898年以後の潜在的な戦争忌避の状況と経済・財政状況が植民地戦争を許さなかったことによる。

しかし、1908年からスペイン人が北部モロッコの一部占領と鉱山採掘・鉄道敷設を開始したことがモロッコ人の反発を呼び起こし、翌09年7月にはモロッコで戦闘が始まる。27年まで続くことになるモロッコ戦争の開始である(1912-13年にスペイン国家がモロッコ北部を保護国=事実上の植民地としたことなど、この後の経過については今回の報告では省略した)。

II. 「モーロ人」の恐怖 リーフ戦争(1921-1927年)

1921年7月のアンワールでのスペイン軍の大敗北(スペイン人は「破局」と呼んだ)は、モロッコでの戦闘をスペイン人がリーフ戦争と呼ぶ新たな様相に転換させた。この「アンワールの衝撃」は、4つの政府の崩壊、プロヌンシアメントの企図と成功(1923年9月)の直接的あるいは主要な要因であった。その後、スペイン軍は戦線拡大か、作戦縮小か、あるいは撤退かの中で動揺する。軍事費の負担(1922年に全歳出の32~33%)も大きかった。リーフでは激しい空爆と毒ガス作戦が展開された。以下、リーフ戦争がスペイン政治とくにスペイン社会にどのような反応を生じさせたのかということに焦点を合わせたい。

2.1. 1921年10~12月の国会討議

この国会で「アンワールの衝撃」に対する各政治党派の反応が一挙に明らかとなった。保守党派は、「裏切り者の懲罰」=「攻撃した原住民の懲罰」を求めた。自由党諸派は、「破局」の「責任」を追及し、また財政を破綻させない戦争政策を要求した。PSOE(スペイン社会主義労働者党)の議員は、モロッコ放棄と「責任」追及を求めた。地域主義派・民族主義派は、カタルーニャ人とバスク人はスペイン国家が遂行する戦争に責任を持たないとして、モロッコ放棄を求めた。この国会では、「原住民」観、「モーロ人」観も表出された。保守党派はとくに「懲罰」の語を多用した。支配されるべき「原住民」が「文明化した」ヨーロッパ人・スペイン人に反抗しあまつさえ敗走させた驚きと狼狽も国会各派に共通して見られた。しかし他方でこの後もスペイン軍は、スペイン人の「血と銭」を節約するとして「原住民」兵への依拠政策を打ち出さざるをえない(しかし、「原住民」兵を動員できる植民地をモロッコ以外にほとんど持たないという現実があった)。

2.2. スペイン社会の反応

2.2.1. スペイン・アフリカ連盟

最有力の植民地派組織であるアフリカ連盟(1913年発足)の反応をその機関誌『スペイン・アフリカ雑誌』*Revista Hispano-Africana*(マドリード、ほぼ月刊)に拠って検討すると、この組織が以下のことを主張したことがわかる。アブドゥルカリームの「懲罰」、ベニウリアゲール(アブドゥルカリームの出身部族でリーフの中心)の打倒/モロッコ保護領予算削減反対/軍事的攻撃だけでなく「政治的行動」もおこなって敵の分裂を促進させること/「原住民」兵はスペイン人兵よりうまく闘う/強固な軍事的指導。

2.2.2. 経済界・金融界

モロッコ戦争開始以降、経済界はアフリカニスモ継続グループと戦争政策慎重グループ(とくに金融界)とに次第に分かれた。前者は多数派にはならなかった。後者を代表する『経済・財政雑誌』*Revista de Economía y Hacienda*(マドリード、週刊)に拠って経済界とくに金融界の反応を検討すると、その一貫した以下の主張がわかる。軍事作戦拡大反対/国内再建が優先する/軍事費膨張が財政困難をもたらす。この主張と並行して、経済界が主導する増税反対運動が1922~23年にかけて広汎に展開された。政治家カンボはこの立場に次第に移行して行った。

2.2.3. 「現地」の恐怖

「現地」のスペイン人が置かれた反応 = 恐怖を『リーフ通信』 *El Telegrama del Rif* (メリーリャ、日刊) に拠って検討すると、まず「破局」直後に在住スペイン人が大きな恐怖のもとに置かれていたことがわかる。『リーフ通信』は「モロコ人」の「懲罰」とそのための軍事力・財政投入を要求した。さらに、次第にメトロポリへの不信を表明するようになった。「主要な障害の一つは...政府が頻繁に変わることにある」(1922年8月) / 「アフリカ政策は政治党派に関係なくなされるべきである」(1923年3月) / 「主要な戦闘はモロッコではなく、マドリードで展開されている」(1923年5月)。「モロコ人」は「野蛮人」、

「半野蛮人」であるとの言説はしばしば見られる。しかし(それ故に)「原住民」兵依拠政策には反対した。

2.2.4. 体制批判勢力

(1) 労働運動諸党派

まず、PSOE は援軍兵士反対の抗議行動を組織できず、その行動は政府(国王)・軍部批判と「責任」問題に集中した。他方で、リーフ人への共感・連帯はまったく見られない(「敵」、「敵の野蛮さ」。スペイン人将兵の「英雄的行為」、「祖国のために、スペインの名のために尽くした」)。スペイン共産党は党内抗争とPSOEとの抗争の渦中にあり、戦闘的ではあったが影響力は少なかった。CNT(全国労働連合)も内部の抗争・論争と弾圧で運動展開に困難な状況に置かれていた。全体として、「破局」からプロヌンシミアメントまでの時期は、労働者勢力の再編成(=分裂)期と重なった。

(2) 民族主義勢力

PNV(バスク民族主義党)『祖国』 *Aberti* 派がモロッコ戦争に最も反対した。戦争は「スペイン植民地主義」「スペイン帝国主義」の攻撃によって引き起こされた / アブドゥルカリームは「スペイン帝国主義によって不当にも攻撃された不幸な祖国の独立の断固たる擁護者」 / 「同様に、全く不当にもスペインの支配に服しているバスク人に、他の自由な人々[リーフ人]を支配するための企てにおいて自分たちの抑圧者[スペイン国家]のために武器を取らせるなどというこんな恥ずべきことがあるだろうか?」 / 「モロコ人の長[アブドゥルカリーム]に、我々の称賛と尊敬と支持の挨拶を!」。『祖国』派はマラガの反乱兵士(1923年8月)を支持した(マラガの反乱兵士の一部はバスク旗を掲げる)。

カタルーニャでモロッコ戦争を最も批判したのはカタルーニャ行動党 *Acció Catalana* だった。モロッコ戦争(への動員)反対 / モロッコ放棄 / 「カタルーニャはこの戦争を引き起こしもしなかったし、カタルーニャはこの戦争を望んでもいない」。しかし、リーフ人への共感と連帯は見られない。「3地域同盟」結成の際にも『祖国』派とカタルーニャ行動党の間の姿勢の差異が表れた(1923年9月)。1923年8~9月、カタルーニャ2県議会でモロッコ放棄が決議されたことはカタルーニャ行動党、カタルーニャ国家運動、ジエガの一部の主張に負っている(以上の2.2.4.の多くの部分は報告者自身の研究に拠っていない)。

2.3. 誰がアフリカで闘うのか

09年には兵役免除制度と予備役動員への反発が爆発したが、兵役免除が制度的には廃止され予備役の動員もなかったアンワールの「破局」の後にはイベリア半島からの援軍派遣に際しての大きな反発の動きは起きなかった。アフリカの地で闘ったのは、一般徴募の「貧しい」兵士（しかし、平均徴兵率は50%くらい）、兵役一部免除のための納付金を支払った「特権」兵士（戦闘中の兵士の20%くらいか）、少数の志願兵、「原住民」兵（「原住民正規軍部隊」=レグラレス、「原住民武装警察隊」、ハルカ=補助的な小戦闘集団）、外人部隊だった。兵士帰還要求はまず納付金兵士から起きた。

2.4. 「政治的行動」の強化

リーフ戦争では、金銭と地位の供与また直接の戦闘支援による「友好モロコ人」「Moros amigos」の獲得の工作が激しく展開された。

2.5. アブドゥルカリームのスペイン人へのメッセージ

1921年12月と1922年8月の2回、アブドゥルカリームはメトロポリの新聞に地声で登場した。「リーフはスペイン人民を憎んでいない」、「軍事的浸入」以外は憎んでいない。

2.6. 対外関係への衝撃

リーフ戦争中には、「破局」を「外部の陰謀」（とくにフランス）に帰せしめる論調が目だった。また、スペイン軍・国家が「原住民」の抵抗に遭っていることは、タンジャの統治・管理形態をめぐる英・仏・西間の交渉におけるスペイン国家の立場を弱体化させた。

2.7. プリモ・デ・リベラ体制の戦争政策

プリモ・デ・リベラ体制の戦争政策は、その前半の「半ば放棄」政策（1924年春～）から植民地国家の共同作戦（1925年4月～）へと旋回した。結局、後者が「勝利」をもたらした。この時期に、軍アフリカ派のマニフェストが見られた。それは『植民地軍雑誌』*Revista de Tropas Coloniales*（1924年1月創刊、セウタ、ほぼ月刊）である。

III. 植民地体制の呪縛 スペイン内戦中のモロッコ（1936-1939年）

アフリカ派軍人がその発生に大きく関わったメトロポリ・スペインでの内戦では、モロッコ植民地が大きな、ときに決定的な役割を果たした。モロッコでは反乱が即時・全面的に成功し、反乱派側に大量のレグラレスが動員されたのである。モロッコでの反乱「平定」による植民地住民管理機構の確立が動員を可能とさせたこと、共和国側がモロッコ民族主義者の要求を拒否したこと（独立・自治要求を拒否）、これを見て反乱派側がモロッコ民族主義者に誘いをかけたこと、などがこの事態を可能とさせた。

反乱派はモロッコ植民地で、メトロポリの内戦への動員のためにモロッコ人優遇政策を採った。モロッコ民族主義者たちは、自分たちの要求実現のために反乱派を利用しようとしたが、他方でフランコはいつかは自分たちを裏切るだろうと警戒していた。

初期に失敗した共和国派はさらに植民地体制の呪縛の表れを見せた。仏・英両国の利益

を考慮してのスペイン領モロッコの「現状の変更」の提案である(1937年2月)。また、共和国側では「モーロ人」の恐怖が叫ばれた。

X. その後のジブラルタル海峡の向こう側

第2次世界大戦中のフランコ政権は西北アフリカ帝国構想を抱いた。他方で、フランコ政権はモロッコ独立まで宥和的アラブ政策も採った。

一応のまとめとして言えることは、スペイン国家・社会・人にとっては、うまく使える対象としてモロッコ人の存在があったということである('Moros amigos', 'Moros malos')。

《以上のI, IIの一部、III については以下の論稿を参照》

深澤安博 「スペイン内戦とモロッコ」(上・中・下) 『人文学科論集』(茨城大学人文学部) Vols.33,34,35, 2000-2001

_____ 「20世紀初頭のスペインのアフリカニズム 1898年の「破局」から帝国の復活へ」(上・下) 同上 Vols.37,38, 2002

_____ 「アブド・アルカリームの恐怖 リーフ戦争とスペイン政治・社会の動揺(1921-1926年)」(上) 同上 Vol.43, 2004

《最近の研究文献》

- * 2000年以降に出版のもの
- * 上記論稿で未引用・未紹介の文献
- * 報告者保有のもの
- * アブドゥルカリームおよび「リーフ共和国」関係文献を除く

Alvarez, José E., *The Betrothed of Death. The Spanish Foreign Legion During the Rif Rebellion, 1920-1927* (Westport/London, 2001).

Aziza, Mimoun, *La sociedad rifeña frente al Protectorado español de Marruecos (1912-1956)* (Barcelona, 2003).

Bouarfa, Mohamed, *Marruecos y España. El eterno problema* (Málaga, 2002).

Cajal, Máximo, *Ceuta, Melilla, Olivenza y Gibraltar. ¿Dónde acaba España?* (Madrid, 2003).

Diez Torre, Alejandro R. (ed.), *Ciencia y Memoria de Africa. Actas de las III Jornadas sobre Expediciones científicas y africanismo*

- español. 1898-1998* (Madrid, 2002).
- El Merroun, Mustapha, *Las tropas marroquíes en la Guerra Civil Española. 1936-1939* (Madrid, 2003).
- Gillespie, Richard, *Spain and the Mediterranean. Developing a European Policy towards the South* (London/New York, 2000).
- Gold, Peter, *Europe or Africa? A Contemporary Study of the Spanish North African Enclaves of Ceuta and Melilla* (Liverpool, 2000).
- González Alcantud, José Antonio (ed.), *Marroquíes en la guerra civil española. Campos equívocos* (Granada, 2003).
- Hidalgo Gómez, Enrique, *El capitán interventor. Marruecos español, 1945* (Málaga, 2003).
- Juan Luque. *Corresponsal de Diario de Barcelona en Melilla. Selección de crónicas (1912-1927)* (Melilla, 2004).
- López Bargados, Alberto, *Arenas coloniales. Los Awlad Dalim ante la colonización franco-española del Sáhara* (Barcelona, 2003).
- Martín Corrales, Eloy, *La imagen del magrebí en España. Una perspectiva histórica siglos XVI-XX* (Barcelona, 2002).
- Martínez Carreras, José U. (coord.), *Relaciones entre España y Marruecos en el siglo XX* (Madrid, 2000).
- Martínez Milán, Jesús M., *España en el Sáhara Occidental y en la zona sur del Protectorado en Marruecos, 1885-1945* (Madrid, 2002).
- Mateo Dieste, Josep Lluís, *La hermandad hispano-marroquí. Política y religión bajo el Protectorado español en Marruecos (1912-1956)* (Barcelona, 2003).
- Memoria histórica de la Segunda República Española en Melilla (1931-1936)* (Melilla, 2000).
- Mesa, José Luis de, *Los moros de la Guerra Civil española* (Madrid, 2004).
- _____ y otros, *Las Campañas de Marruecos (1909-1927)* (Madrid, 2001).
- Moga Romero, Vicente, *El soldado occidental. Ramón J. Sender en Africa (1923-1924)* (Melilla, 2004).
- _____, *Las heridas de la historia: testimonios de la guerra civil española en Melilla* (Barcelona, 2004).
- Nerín, Gustau/Bosch, Alfred, *El imperio que nunca existió. La aventura colonial discutida en Hendaya* (Barcelona, 2001).
- Paz, Abel, *La cuestión de Marruecos y la República española* (Madrid, 2000).
- Ramírez, Angeles/López García, Bernabé (eds.), *Antropología y antropólogos en*

- Marruecos. Homenaje a David M.Hart*(Barcelona,2002).
- Ramiro de la Mata,Javier, *Origen y dinámica del colonialismo español en Marruecos* (Ceuta,2001).
- Rodríguez Mediano,Fernando/De Felipe,Helena(eds.), *El Protectorado español en Marruecos.Gestión colonial e identidades* (Madrid,2002).
- Sánchez Montoya,Francisco, *Ceuta y el norte de Africa. República, guerra y represión 1931-1944*(Granada,2004).
- Sánchez Ruano,Francisco, *Islam y la Guerra Civil Española. Moros con Franco y con la República* (Madrid, 2004).
- Villalobos, Federico, *El sueño colonial.Las guerras de España en Marruecos* (Barcelona,2004).
- Villanova, José Luis, *El Protectorado de España en Marruecos.Organización política y territorial* (Barcelona,2004).
- Viñas,Angel, *Franco, Hitler y el estallido de la Guerra Civil. Antecedentes y consecuencias* (Madrid,2001).